

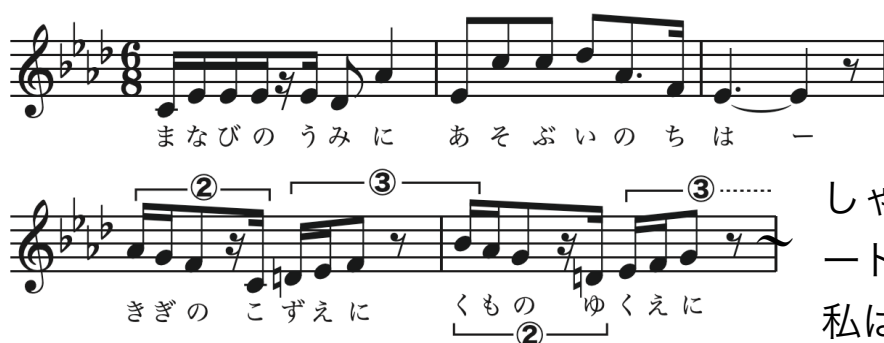
歌が生まれる

校歌制作レポート 第10回



イラスト：山崎奈緒

脱いだ服のポケットに…



第2回レポートの楽譜とこの楽譜、番号を照らし合わせてみてください。

「木々の梢」からの旋律、「あ、これ、なんか知ってるぞ」と思った方がいらっしゃるかも。そう、第2回レポートに出ていたアレです。実は私は書いてから気がついた。当初の思いつきとは全く違う使い

方になりましたが、これはこれでアリだと思います。本を買うつもりでGパンの尻ポケットに千円札突っ込んで本屋に出かけたものの、立ち読みだけで帰ってきてそのまま忘れてしまい、翌週、洗濯済みのそのGパンをまた履いて出かけたらいかがけずパリパリの千円札が尻にあることに気づいて、それでコーヒーを飲んだ…みたいなことか？ ちょっと違うか？

まあ、それはよしとして、作曲中、こういうことは往々にしてあるものです。モノを創るというのは、すでに知っていながら雑念に埋もれて忘れてしまっていることに、だんだん気づいていく過程なのかもしれません。

町田育弥 Profile

桐朋学園大学で作曲を専攻。中・高等学校教諭、音楽大学講師など常に教育に携わりつつ、作・編曲・演奏活動を展開。作品は、歌曲、室内楽、吹奏楽、管弦楽、劇音楽など多岐におよぶ。著書にピアノ教本「みみをすます」全4巻、歌曲集「あったかい」などがある。2014～2020年まで本学幼児教育学科教授を務めた。現在、本学客員教授、認定こども園恵泉幼稚園（さいたま市）園長。

♪♪♪ 8月31日 レポート

全体の構成を考える

さて、暫定ではありますが、ここまでは一応書いた、と。これを大雑把に分析すると、下の楽譜に付記した書き込みのようなことになるでしょう。

で、続きを考えてもいいのですが、寄せられた言葉を拾いながらズルズル進めていくと、とりとめのないことになってしまいそうなので、今回は全体の構成を考えてみます。

まず、1番・2番～と、同じ旋律で違う歌詞を歌う、いわゆる有節歌曲の形式をとるか、それとも、ワンコーラス歌いきりにするか…。これは後者にする。理由は、有節形式にすると、言葉のイントネーションと旋律の整合性を保ちにくくなること、また、短い方が明快なメッセージをこめることができ、式典や行事で歌う時もスマートだろうと思うからです。

では、ワンコーラス歌いきりにするとして、その中身をどうするか？ 形式上のことと言えば、これは変則的な三部形式、つまり、簡単に言えば、この後中間部を経てテーマ「ドミレラ」を変イ長調で復帰させるが、冒頭7小節とは別の展開を経て終結する、という形にしてみようと思います。

後続部分で何を歌うか？

全体の構成が、**A: テーマの提示** → **B: 中間部** → **C: テーマ復帰と終結**であるとして、**A**はすでに作ったので、次にやるべきは**B**と**C**で歌う内容。まず**B**ですが、これは**A**の最後に置いた「未だ見ぬ明日を問う」を受け、その中身を学生の姿を通して描いてみようということで、例の「パッチワーク」や、そこに漏れた言葉を再検討して次のような歌詞を考えました。

～響き合う夢は 若き季節の 笑い・躓き・迷う日の 道標～

これについては、すぐに続報します。それではまた。